

第8節 美園古墳と集落の関係

渡 辺 昌 宏

1 美園古墳の時期

先述したように、美園古墳は以下に述べる三点の理由で古墳時代前期末から中期初頭に位置づけられよう。

(1)調査区の土層断面観察結果から、調査区中央部の布留式集落と同一の遺構面に造られている古墳である。

(2)周濠から出土した土器及び埴輪類の時期は、布留式前半のやや新しい段階に属すると考えられる。

(3)古墳の立地が低地部の集落に隣接している。

2 周辺の同時期古墳（第447図）

周辺の主要な古墳を選んで、概略的に述べてみたい。

⁽¹⁾ 巨摩古墳

美園古墳の北東約1.9Kmに位置する。この古墳は本来5世紀後半に相当するが、周辺から検出された円筒棺に使用されている円筒埴輪が、時期的に遡るものであった。周辺にこの時期の古墳が存在する可能性が大きい。

⁽²⁾ 萱振1号墳

美園古墳の北東約1.1Kmに存在する。一辺約26mの方墳で、美園古墳の埴輪とほぼ同時期になると思われる、精巧な鞍形埴輪、家形埴輪、鱈付円筒埴輪等が出土した。美園遺跡同様に、隣接して同時期の集落が営まれていたようである。

⁽³⁾ 西ノ山古墳

美園古墳の東方約4.7Kmに位置し、生駒山地西側斜面の丘陵上に立地する。全長約55.0mの前方後円墳で、主軸方向は北西から南東方向である。内部主体は竪穴式石室と思われ、豊富な副葬品を伴っていた。時期については、美園古墳より遡る可能性がある。

⁽⁴⁾ 花岡山古墳

西ノ山古墳の南側約0.25Kmにある。西ノ山古墳同様に、生駒山地西斜面の丘陵上に立地していた。東西方向に主軸をもつ前方後円墳であったと思われるが、墳丘は残っていない。出土した埴輪は、美園古墳とほぼ同時期になると考えられる。

⁽⁵⁾ 塚ノ本古墳

美園古墳の南西約4.3Kmに存在する。羽曳野丘陵の先端部に立地しており、墳形は円墳ないし前方後円墳のいずれかであろう。径約60mで円筒埴輪列をもち、家形埴輪等の形象埴輪が多数出土していた。美園古墳とほぼ同時期に造られた古墳と考えられ、墳形が明らかではないが東西

方向に主軸をもつ前方後円墳の可能性はある。また周濠の外堤には、埴輪円筒棺が数基確認された。

特に美園古墳と萱振1号墳とは以下に述べる三つの共通性があった。

- (1) 平野部の集落に隣接して造営された古墳である。
- (2) 両者とも小形の方墳であった。
- (3) 墳丘の規模に比べて優秀な形象埴輪を伴っている。

3 集落との関係

美園古墳周辺部には、近畿自動車道関連の調査で明らかとなった、ほぼ同時期の集落が6つ存在する。北から順にあげれば、美園遺跡B地区集落、美園遺跡C地区集落、美園遺跡G地区集落、佐堂遺跡A地区集落、佐堂遺跡C・D地区集落、久宝寺遺跡北地区Cトレンチ部分の集落である。これより南については、当時の長瀬川(旧大和川)の流路が確認されており、地形的に隔絶されると言えよう。また美園遺跡の北側に隣接する友井東遺跡⁽¹⁰⁾にも、同時期の集落が営まれている可能性がある。

布留式の集落に隣接して水田、畠等の耕作地跡も見つかった。北から言えば、美園遺跡B地区集落の北側、美園遺跡B地区集落とC地区集落の中間部分。美園遺跡G地区集落と佐堂遺跡A地区集落との間。佐堂遺跡C・D地区集落と久宝寺北地区Cトレンチ部分集落との間に、それぞれ広がっている。

墓域は友井東遺跡の南端から美園遺跡A地区にかけてと、美園遺跡C地区南端部、佐堂遺跡C・D地区集落の南側でそれぞれ検出された。

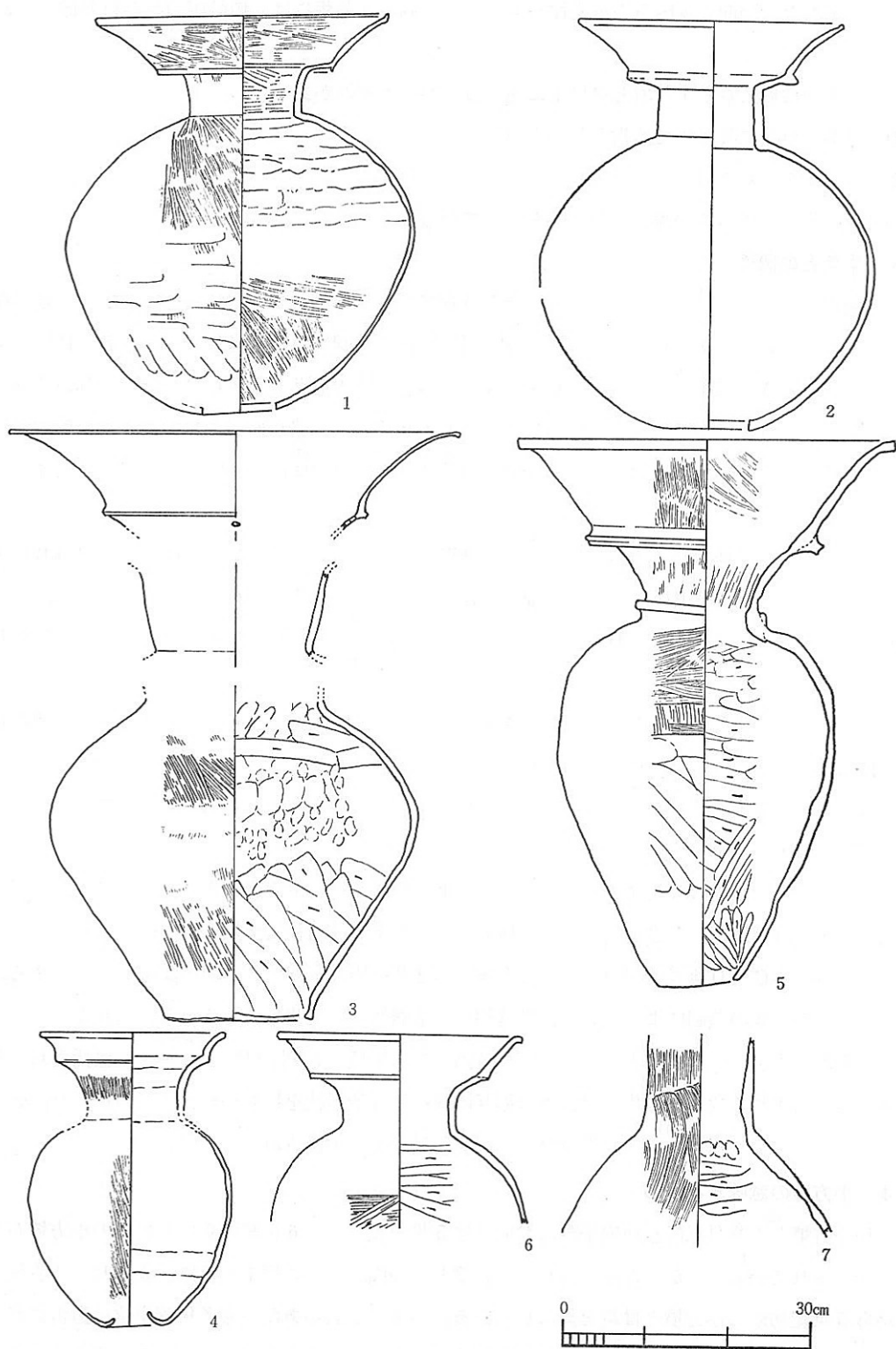
このように各集落は一定の距離を置いて存在しており、その間には水田、畠等の耕作地と墓域が設けられている。

各集落に伴う墓制にも差異が見られた。友井東遺跡南端から美園遺跡A地区にかけて広がる墓域では、方形周溝墓と土器棺墓が確認されている。美園遺跡C地区南端には美園古墳がある。さらに佐堂遺跡C・D地区集落の南側には土墳墓が2基検出された。各集落に隣接して存在する。それぞれの墓域の墓制による差異は、集落相互の階層性を具現化していると考えられる。

大胆な仮説を述べれば、大河川によって区画される領域(水利関係等によって包括される地域)内に営まれる数ヶ所の集落は、集落相互に緩やかな階層性を持ちつつ、1つの単位を形成していたのではなかろうか。その単位を代表する首長の墓が美園古墳であろう。

4 小方墳の意味するもの

長原古墳群⁽¹²⁾の発見以降、河内平野においては5世紀後半から6世紀中葉にかけての小方墳が多数確認されている。しかしながらこれらの古墳と、美園古墳、萱振1号墳に代表される4世紀末から5世紀初頭の小方墳とは趣を異にしている。つまり前者があたかも各集落単位に造営されているのに対して、後者の方はより広範囲な領域内で1基だけ造られるような状態が想定されるからである。このことは、河内平野部において5世紀後半以降の在地首長の領域がかなり縮小され



第448図 各古墳出土の壺形埴輪

ることを意味すると同時に、古墳を媒介とした「大和政権」の在地支配強化が考えられるのではなかろうか。それを物語るかのように、美園遺跡では5世紀中葉以降意識的に集落が移動させられており、その背景には政治的な動向が密接に働いていると想像される。

5 壺形埴輪の意味するもの

近畿地方では、美園古墳を含めて数ヶ所の古墳から壺形埴輪⁽¹⁵⁾が出土している。ここでは代表的な資料を抽出して比較すると同時に、美園古墳に壺形埴輪が伴う意味を探ってみたい。

壺形埴輪を伴う主な古墳としては、箸墓古墳⁽¹⁶⁾（第448図1）、桜井茶臼山古墳⁽¹⁷⁾（第448図2）、小石塚古墳⁽¹⁸⁾（第448図3）、壺井御旅山古墳⁽¹⁹⁾（第448図4）、美園古墳⁽²⁰⁾（第448図5～7）があげられる。形態的な特徴では小石塚古墳、壺井御旅山古墳、美園古墳の資料が類似していた。これら3つの古墳は時期的にも近接しており、壺形埴輪の4世紀末以降の姿を代表している。しかし美園古墳を除いては、円筒埴輪を伴っていた。美園古墳は壺形埴輪だけによって周囲を巡らしていたと思われる、その点が極めて特異である。古墳を構成する要素の中で、埴輪の占めるウェイトはかなり大きかったと考えられる。あたかも集団の独自性が、壺形埴輪によって代表されているかのようである。飽くまで想像の域を出るものではないが、初めて埴輪の使用を許された在地首長の要請によって製作された埴輪には、前時期からの伝統的墓制であった方形周溝墓の供献土器のイメージが、その要望の中に入っていたのかもしれない。

塚ノ本古墳等によって代表される首長権の下に構成される首長の1人として、美園古墳の被葬者は「大和政権」から埴輪⁽²¹⁾の分与を許されたのではなかろうか。だからこそ一辺約7mの極めて小規模な方墳にも拘らず、精巧な家形埴輪を持ち得たのであろう。観念的な説明になってしまったが、それを実証していく作業が今後に残されている。

本節の作成にあたっては、広瀬和雄、天野末喜、高島徹、野藤和也の各氏より御教示をいただいた。記して感謝の意を表したい。

註(1) 玉井功他『巨摩瓜生堂』大阪府教育委員会、(財)大阪文化財センター 1981年。

(2) 広瀬雅信『萱振遺跡現地説明会資料Ⅰ』大阪府教育委員会 1984年。

(3) 『大阪府文化財分布図』大阪府教育委員会 1977年。

(4) 註(3)文献、川西宏幸「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第64巻第2号 1978年。

(5) 中西靖人他『長原』(財)大阪文化財センター 1978年。

永島暉臣慎氏他『長原遺跡発掘調査報告』長原遺跡調査会 1978年。

(6) 三宅正浩編『佐堂(その1)』大阪府教育委員会、(財)大阪文化財センター 1984年。

(7) 阪田育功他『佐堂(その2)ーⅠ』大阪府教育委員会、(財)大阪文化財センター 1984年。

(8) 『久宝寺遺跡現地説明会資料(Ⅰ)』大阪府教育委員会、(財)大阪文化財センター 1982年。

(9) 註(8)文献参照。

(10) 亀島重則編『友井東(その1)』大阪府教育委員会、(財)大阪文化財センター 1984年。

(11) 萱振1号墳周辺及び巨摩古墳周辺にも、数ヶ所の集落によって構成される領域が存在すると考えら

れる。

- (12) 註(5)文献参照。
- (13) 巨摩廃寺遺跡(5世紀後半)、山賀遺跡(6世紀中葉)、友井東遺跡(5世紀後半)、亀井遺跡(5世紀後半)、城山遺跡(5世紀後半)。
- (14) 長原古墳群を除く。長原古墳群のあり方は、群集墳につながる政治的背景を持つと考えられる。
- (15) 底部穿孔壺形土器との明確な区別は難しい。ここでは、焼成前に穿孔された大形のものを広義の壺形埴輪と呼ぶことにする。
- (16) 中村一郎・笠野毅「大市墓の出土品」『書陵部紀要第27号』 1976年。
- (17) 末永雅雄・小島俊次編『桜井茶臼山古墳』奈良県教育委員会 1961年。
- (18) 柳本照男編『史跡大石塚・小石塚古墳保存事業に伴う調査報告』豊中市教育委員会 1980年。
- (19) 藤沢一夫他『羽曳野市壺井御旅山前方後円墳発掘調査概報』大阪府教育委員会 1968年。
- (20) 細部についてはかなり異っているが、体部が長くなる点で共通しており、本来の壺の形から変化してきている。
- (21) 埴輪そのものが与えられるというよりも、工人の派遣等を指す。塚ノ本古墳の被葬者を媒介とした埴輪の分与も考えられる。